
俺が異世界の神になる!?

黒嶋沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が異世界の神になる！？

【Nコード】

N1739Y

【作者名】

黒嶋沙羅

【あらすじ】

ひよんな事から“世界管理者許可証”を手に入れた渡部タクミは異世界エレスティアの神様をやることになってしまった！？

アホな助手に言われるがまま、仕方なく、荒廃した世界の復興や信仰力の獲得に奔走するタクミだったが、思わぬライバルの出現や、様々な陰謀に関わるうち、徐々に世界の秘密に近付いていくことになる（予定）

11/5:1-2 交易都市エーテルを掲載しました！

プロローグ!!

目の前に広がる見渡すばかりの荒野を眺めながら、俺は絶望感に包まれていた。

人っ子一人どころか、草木一本すら生えていない不毛の大地である。こんなところに取り残されてしまえば仕方のないことだろう。

「どうしてこうなった……？」

自分の身に何が起こったのか思い返してみる。

あれはそう、半日ほど前のこと。

学校帰り、繁華街の近くを歩いていたら俺は、身なりのいい老紳士が不良に絡まれているのを発見してしまった。

普段の俺なら適当にやり過ごすところだが、魔が差したと言うべきか、むしゃくしゃしていたというか、ともあれ不良どもを軽くボコボコにして立ち去ろうとしたところ、後ろから件の老人に呼び止められたのである。

謝礼と称して渡された封筒を一度は断ろうとしたが、なんだかなで人の良さそうな老人に押し切られてしまった。

まあ、札の一枚でも入ってるのかと期待しながら、家に帰って開けてみたのだが……

出てきたのは、一枚のカードのみ。

「ワールドエンジニアライセンス世界管理者許可証？」

やたら格式張ったカードには、そんな一文が記されていたのである。

世界管理者。

聞き慣れない言葉に、俺の頭は疑問に思うより先にかかわれたという結論に達していた。

あの老人がどういう意図でこれを渡したのかは知らないが、少な

くとも価値のあるものではないだろう。

あえなくゴミ箱行きとなったカードのことは、飯食って風呂入って、寝る前に妹の小言を聞かされて部屋に戻った頃にはすっかり忘れてしまっていた。

いつものように就寝し、いつものように目が覚め。

そうして、いつもの日常が始まるかと思っていたら、何故か荒野に突っ立っていたのである。

ちなみに夢がどうのこうのという下りは三十分ほどやらかしたので端折らせてもらおう。

「うん、現実だよな、これ……」

さんざん叩いたり抓られて腫れ上がった頬をさすりながら、俺は現実逃避を止めることにした。

おそらく、この異常事態の原因は例のカードだろう。

他に理由も思い付かない。

だが、今は手元にないカードのことで悩むより、この危機的状況を脱することが先決だった。

「とりあえず、街か人を探すか……」

こんな不毛の荒野に人がいるのかもわからないが、こんなところでじっとしていればいずれ干物になってしまう。

そう思い、歩き出したのはいいが……進めど進めど街はおろか人にも生き物一匹すらも遭遇しない。

もしかすると、この世界に存在するのは自分だけで、このまま孤独に朽ち果てるしかないんじゃないか、と絶望的な気持ちに陥ってしまった。

と。

「なんだ？」

遠くから、かすかに音が聞こえる。

風に紛れて聞こえにくいのが、よくよく耳を澄ませば、それは銃声のようにも聞こえた。

「人が……いるのか？」

少なくとも、銃を使えるような技術を持った何者かが近くにいる。そのことは俺の心から少しだけ絶望を払うのに貢献してくれた。

だが、それと同時に不安もよぎる。

「銃声ってことは……誰かが戦っているのか？」

もし、それが友好的な相手でなければ……あるいは、友好的だとしても、戦場に飛び込むことには違いない。

躊躇は、しかし、一瞬で振り払う。

「考えてもわからないなら、行動するしかないだろ！」

こういうところを短絡的だという友人もいたが、俺はそのことを欠点だとは思わない。

例えばそのことで失敗したとしても……何もしなかったという後悔だけはしたくなかった。

俺は残った気力を振り絞り、荒野を駆ける。

危機的状况がそうさせるのか、自分で思っていたより身体が軽かった。どうやら、俺はあきらめも悪いらしい。

だが、それもすぐさま絶望に変わる。

「何だ、あれ……？」

砂の丘陵を越えた途端、それは俺の視界いっぱい飛び込んできた。

はじめは、重機か何かの類かと思ったが……人が作ったものにしては、あまりにも大きすぎる。

しかも、そいつはワニのような巨体を揺らしながら、重苦しいほどの殺気を放っていた。

おそらく生き物なのだろう。顎が四つに裂けるワニがいるとすれば、だが……少なくとも俺の知識にそんな生き物はいない。

そして、それよりも問題なのは、そいつが狙っている獲物である。キヤラバンか何かだろうか。砂漠を渡る隊商のような風貌の連中が、荷馬車を走らせ怪物から逃げ惑っていた。

その中にいる、ダチヨウのような、あるいは二本足で直立したトカゲのような生物に跨った少女が、不釣り合いなくらい大きな銃を

片手に巨大生物を撃退しようとしている。

「が、彼女の放つ弾丸は、硬い皮膚にあっさり弾かれていた。襲い来る怪物を退けるにはあまりにも心許ない。」

「ッ、この時期に岩石ワニがこんなに凶暴化してるなんて！」
舌打ちしつつも、少女は仲間を安全な場所に逃がそうと、巨大な怪物に立ち向かう。だが、このままでは、彼女の命は風前の灯火であることは誰の目にも明らかであった。

だからといって、俺に何か出来るとも思えない。

「くっ、どうすれば……」

「あー、いた！ 神様！ 神様ですよね！？」

と、眼下の戦いに気を取られていた俺の頭上に、ちっこい女の子が舞い降りてきた。

金髪碧眼、背中には白い翼も生えており、まるで天使のようにも見えるが……何となくバカっぽい。

アホ毛とかアホ毛とか。

「か、神様？」

「神様ですよね？ お迎えに上がりました！」

その未確認飛行少女が言うことを理解できず、俺はしばし呆然とする。

神様つてのは、俺のことだろうか？

きよろきよろと周囲を見回しても、他に人影らしきものはない。

すると、バカ天使は無い胸を張り、

「そうです、前任の世界管理者カミサマよりお話は伺っています。あなたがこの世界の新しい神様ですよね？」

「えーと……」

世界管理者許可証とやらを貰ったのは確かだが、残念ながら今は手元にないのである。

だが、目の前のバカ天使はあんまり細かいことは気にしてないらしい。

そして、

「風環の大地エレスティアへようこそ！　ボクは神様のサポートを
させていただき、アイルって言います。気軽にアイちゃんと呼んで
くださいね！」

そいつはとびっきりの笑顔でそう言い放ったのだった。

プロローグ!! (後書き)

はじめまして、黒嶋沙羅です。

しばらく小説から遠ざかっていたのですが、心機一転こちらで連載してみることになりました！

あえて初挑戦の異世界モノです(笑)

マシクラフトやアトレイザー要素が入っているようないないような……まあ、筆者は基本的に行き当たりばったりなので、どこに転がるかは分かりません。

1 - 1 神様の力

「どうやら、俺はとんでもない事に巻き込まれてしまったらしい。そう気付くのに、あまり時間はかからなかった。」

「どうしました、神様？」

目の前のバカ天使は緊迫した状況にも関わらずニコニコしていたが、彼女の言った“神様”というのが事実だとすれば、この状況を覆せるかもしれない。

「おい、お前の言う神様ってのは何が出来るんだ？」

「えつとですね、構築、変換、分解の三大チート能力です」

「それって……あの化け物を倒すのに役立つのか？」

「無理ですね。そもそも、生き物に直接作用するような能力じゃないですし……」

役に立たない神様だな、おい。

だが、直接攻撃が出来なくても、使い方によっては何とかなる、と思い込むしかないだろう。

「で、どうやれば能力ってのを使えるんだ？」

「じゃあ、神様になってくれるんですね！？ やたー！！ それでは、早速契約をば……」

契約つてのが気になるが、今はそれどころじゃない。

で、何をやるかと思えば、バカ天使は俺の側にひらひらと飛んできてほっぺたにチュツとやりやがった。

あっさりしているが、どうやら、これで契約完了らしい。

「これでオツケーです！ 能力を使うには、まずは物質の構造をイメージして……」

簡単な説明を受けながら、早速能力を使おうと眼下の状況を確認すると、例の少女が今まさに巨大なワニの前足に踏み付けられそう

になっていた。

考えている余裕はない。

「つ、構築ワールド！」

とりあえず、鋼鉄の半球ドームをイメージして少女を覆い隠すように配置する。思ったより簡単に出現したそれは、化け物の鈍重な一撃を受け止めるが、イメージが悪かったのか、あるいは化け物の体重が重すぎるのか、ミシミシと音を立てて今にも崩れそうになっていた。

「だったら、これで！」

すぐさま、化け物の足下を指定して地面を削り取る。

そうやって、完成した簡易落とし穴に落下していく化け物を見送ると、俺は少女の元へと駆け寄った。鋼鉄のドームを解除しつつ、安否を確認する。

「大丈夫か？」

「うん、なんとか……でも」

少女も、彼女の乗り物もひとまず無事のようにだが、あまり顔色は良くない。

「これをあなたが……？ いえ、それより、あいつ地面を潜れるのよ！」

「まさか！？」

言うよりも早く、本能が身体を動かしていた。

少女の乗り物であるダチヨウかトカゲのような生き物も、彼女の襟首を啜えて飛び退る。

瞬間、盛り上がる地面とそこから突き出される四つに裂けた顎が何もない空間をパクリと飲み込んでいた。

間一髪といったところだが、敵は簡単に諦めてくれないらしい。

なおも追いつがる化け物に、俺は後退しつつも対抗策を講じるが、逃げながらではるくに集中も出来ないのに気付く。

「乗って！」

それを見かねたのか、少女が片手を差し伸べて乗り物に引き上げ

てくれた。だが、この生き物がどれだけの脚力があるのかは分からないが、二人分の体重を抱えて逃げ切ることは出来ないだろう。

「神様、どうするんですか？」

「うーむ」

生半可な方法では足止めにもならない。ならば、ここは攻勢に転じるしかないだろう。

そのためには、一瞬でも隙を作るしかないが……。

「ということ、ちょっと逝ってこい！」

「どういう事ですか!？」

ぶんぶんと飛び回っていたバカ天使を引っ掴んで、化け物へと放り投げる。わーきゃーと叫びながら逃げ回る未確認飛行少女に気を取られたのか、化け物の足が一瞬だけ止まった。

それを見逃すわけにはいかない。

「全力全開、構築！」

化け物の頭上に可能な限り巨大な鉄塊を生み出す。底の部分が円錐状に尖ったそれは、自由落下で化け物の頭部に突き刺さると、莫大な質量でもって大地に縫い付けていた。

「よし！」

「っ、まだよ！」

さすがに頭部を潰されてはひとたまりもないだろう。その考えは、しかし、あっさりと霧散した。

頭蓋を砕かれ貫かれ、それでもそいつはのたうち回りながら自分を縛る楔を引き離そうとしている。

恐るべき生命力だ。こんな化け物が徘徊する世界に飛ばされて、うまくやっていけるのか……不安は尽きない。

「でも、逃げる時間は稼げたいね」

化け物がすぐには追ってこれないのを確認し、少女は乗り物を反転させる。

先に避難していた仲間と合流し、ひとまず安全圏まで移動した俺達は、ようやく人心地つくことが出来た。

「まずはお礼を言わせて貰うわね。あなたのおかげで助かったわ、ありがとう」

どういたしまして、と適当に相づちを打つと、少女は蒸れたターバンを脱ぎつつ自分の持っていた革袋の水筒をよこしてくれる。ちよと喉も渴いていたところなので、ありがたい。

「で、あなたは何者なの？ こんなところを軽装でウロウロしてるなんて……それに、さっきの能力。あれ、ただの魔法ではないわよね？」

神様です、と言ったら信じてくれるのだろうか。俺だって未だに信じられないのに。

それに、能力を使った影響か、疲労感で考えがまとまらない。今になって恐怖がこみ上げてきたのか、水筒を持つ手がプルプルと震えていた。

「まあいいわ。私は風の旅団ウィンドノーツのテイオ、テイオ・バートン。あなたは？」

「渡部ワタラベタクミ。タクミでいい」

「タクミ、か……私達、近くの街まで荷物を運ぶ途中なんだけど、一緒に来る？」

「よろしく頼む」

自分の居場所すら分からないのだ、とりあえず人のいるところで情報を集めるのが先決だろう。

そういえば、あいつはどこに行ったんだと思っていると、遅れてバカ天使がふよふよと飛んでくるところだった。

「神様、酷いですよ。ボクを置いていくなんて」

「あー、完全に忘れてた」

我ながら酷い扱いである。さすがに謝った方がいいのだろうか。

「でもでも、神様がボクを頼りにしてくれたって事ですよね！ えへへ」

「はいはい」

やたらとポジティブなのもバカっぽさを加速しているが、ほめて

ほめてとすり寄ってくるバカ天使はけなげで可愛いと言えなくもない。

が、そのバカ天使の表情が曇る。

「神様、信仰力が少なくなってますね……」

「信仰力？」

「神様の力の源ですよ、能力を使いすぎると減っちゃうんです」

「そっぴや、無理矢理能力を使っただけ。やたら全身がだるいのもそのせいだろうか。」

「本来、信仰力は使ってもゆっくり回復するんですが、あんまり使すぎてゼロになると……その、存在できなくなつて神様は消えちゃうんです」

「そっぴやのは早く言え！」

命に関わる重要なことを今更言われても色々と困る。

あるいは、信仰力を使い切れれば元の世界に戻れるのだろうか……あいにくとそれを確かめる勇氣は俺にはない。

「でもでも、信仰力さえあれば神様は死ぬこともありませんし、病気になるったり老化することもありませんよ！ やったね！」

何がやったのかは分からないが、そうなると信仰力は大事に使わないといけないだろう。神様というのも案外不便なのかもしれない。

「その信仰力つてのは増やすことも出来るのか？」

「はいです。多くの人に認められれば、それだけ信仰力も増えますね。他にも祠を建てたり神殿を建てたり……あつ、彫像とかでも信仰力を確保できますよ！」

バカ天使の説明に、何故か大仏になつた自分を想像して……うん、やめとこう。

とにかく、頑張つて信者を獲得すれば能力も自在に使えるようになるらしい。ゲームの経験値みたいなものだろうか。

「信仰力が上がれば、使える能力の規模も上がります。山を消したり城を建てたり……それこそ、大陸一つを創造したりも出来るんで

すよー！」

えっへん、と何故か自分のことのように威張るバカ天使はさておき、当面食いつなぐ分の信仰力は確保した方が良さそうである。

「本当に神様をやる羽目になるとは……」

頭の痛い話であるが、生きていくためには仕方ないだろう。

「一応聞いてみるが、元の世界に戻ったりは……」

「出来ません」

「ですよー」

きっぱりと言われてしまったては諦めるしかなかった。あっちの世界のこと心残りではあるが、今は現実を受け入れるしかない。

「さつきから何独り言喋ってるの？ もしかして電波くん？」

「何って……ひょっとして、見えないのか？」

「……………？」

俺達の会話にティオは怪訝な表情を浮かべるのみ。どうやら、普通の人間にはバカ天使のことが見えないようである。便利なのか不便なのか、とりあえず人前では小声で話すこととしよう。

「えへへー、つまみ食いしても怒られませんよ！」

「おい！」

思わず脳天にチョップを叩き込むと、バカ天使の頭の輪っかがパリンと割れてしまった。ってか、軽く叩いただけなのに、脆すぎるだろ。

「にゃー！？ ボクの輪っかが……輪っかが……」

「……………」

割れた輪っかを抱えておろおろと涙するバカ天使……な、何と云うか気まずい。

「ほら、そろそろ出発するよー夜までに街に入りたいたからね」

「ああ、分かった」

ティオに促され、改めてバカ天使を確認すると……どこから取り出したのか、市販のガムテープで必死に輪っかを補修しているところだった。

意外と打たれ強い……のだろうか。

「できたー！ あ……」

なんとか貼り付け、持ち上げると、ガムテープごと剥がれ落ちる。それを繰り返し、ようやく補修を済ませると、彼女の頭に不格好ながら天使の輪っかが戻っていた。

当然のように、バカっぽさが加速したのは言うまでもない。

1 - 1 神様の力（後書き）

ボクと契約して神様になってよ！

1 - 2 交易都市エーテル

日が沈む前には、俺達は目的地に到着していた。

「ここが交易都市エーテル。大陸中の人や物が行き交う交易の要所だよ」

荒野に現れた立派な町並みに、俺は思わず面食らう。テイオの銃といい、思ったより文明が発達しているらしい。

東京などの大都会とは比べるまでもないが、巨大な外壁に覆われた都市は俺が知ってる街とは違った重厚なたたずまいを見せている。だが、よくよく見てみると、外壁の一部が破損していたり、地震にでも遭遇したように倒壊した建物があったりと、安穩とした空気がだけではないのが見て取れた。

俺の脳裏に戦争という言葉がよぎる。

テレビのニュースや歴史の教科書くらいでしか知らない世界、それがここでは身近な出来事なのだろうか。

聞いてみたい気もするが、あいにくとテイオは商品の荷下ろしにかかりつきりである。手伝おうかとも思ったが、思ったより疲労が濃く、力が入らなかつた。

「信仰力か……」

自分が信仰される対象になると思わなかつたが、未だにピンと来ない。異世界に来てしまったことも、神様をやる羽目になったことも……もう一度寝て起きれば元の日常に戻るんじゃないかと淡い期待を抱いてみても、目の前にある世界の色も匂いも温度も幻と化すことは無かつた。それが、何度となく自問自答を繰り返して得た結論である。

覚悟はした、つもりだつた。

でも、本当は流されていただけなんじゃないか……そう思ってし

まうのは、気が弱くなってる証拠だろうか。

自分がこんなに繊細な人間だとは思わなかったが、それでもなんとか前向きでいられるのは、ひよっとしたらバカ天使のお陰かもしれない。

あいつのバカっぽさと明るさが、俺の癒しになってるのかも。そう思い、ハエのように付きまとう未確認飛行少女を探してみると、やたら耳の長いネコのような小動物とリンゴを奪い合っているバカ天使の姿が見えた。

前言撤回、もうちょっとまともな相棒が欲しかった。

化け物の時もそうだが、人間以外の生き物には姿が見えるらしく、リンゴを挟んで睨み合うネコもどきとバチバチと火花を散らしている。

フーッ！

「そ、そんな顔をしてても渡しませんよ！」

どこから拝借してきたのか、美味しそうに色付いたリンゴを渡すまいと奮闘するバカ天使だが、体格も迫力もネコもどきが圧倒的に勝っていた。頑張れバカ天使、負けるなバカ天使。骨くらいは捨てやるぞ。

シャーッ！

ぺしぺしぺし！！！！

「ぎゃーっ!?!?」

機先を制したバカ天使の鼻っ面に、ネコもどきのネコパンチが繰り返し叩き付けられる。

そうして、バカ天使が怯んだ隙を見逃さず、ネコもどきはリンゴを啜えて一目散に走り去ってしまった。

「やっぱり駄目だったか……」

「あああう、神様ーっ！」

泣きついてくるバカ天使を適当になだめてやる。まったく、何を考えてリンゴなんて持ってこようとしたのか。

「そんなにお腹が空いたのか？ 食べ物くらいなら俺が……」

「違うの、神様の元気がなかったから、それで……」

それで、元気付けるためにリングを持ってこようとしたらしい。

真っ先に食べ物を思い浮かべるあたり、バカ天使のバカ天使たるゆえんなのだろうが、気持ちだけは受け取ってやるう。

「よしよし、まったく……」

「えへへ」

「タクミ、ちよつといい？」

バカ天使を撫で回していると、仕事が一段落したのかテイオが戻ってきた。相変わらず銃は腰の後ろに下げているが、ターバンもマントも外して軽装になると快活なイメージが強調される。

が、それよりも特徴的だったのは、彼女の頭頂部とお尻から生えた異物だった。

以前見たときはただの癖っ毛か何かだと思っていたのだが、尻尾までそろつと見間違うはずもない。

「テイオ、それって……」

どう見てもネコのそれを思わせる耳と尻尾は、彼女の感情にあわせるようにびよびよこと動いている。

すると、俺の戸惑いを見透かしたように、テイオは得心がいったのか頷いていた。

「亜人なんて珍しくもないのに、初めて見るみたいね」

まるで値踏みでもするかのように、テイオの瞳は俺の心の奥底までも見据えている。

「あなた、もしかして……」

彼女が何を結論づけたのか……その答えを聞くよりも早く、あたりがにわか騒がしくなったかと思うと、どこからか爆発音までも聞こえてきた。

見ると、遠くで火の手が上がっている。

「サラマンダー火竜族の襲撃だ！」

「くそつ、またか!？」

「……っ、こんな時に……タクミ、話は後。今は逃げるわよ!」

戦場の匂いと言うべきか、張り詰めた空気が立ち込める町中を、
ティオは俺の手を引いて駆け出していた。

逃げ惑う人波に揉まれながらも、安全な場所を目指す。

「ひとまず、仲間と合流して……ッ!？」

「なんだ!？」

突如として頭上を横切る何かの影に、ティオは咄嗟に踵を返して
いた。次の瞬間には、俺達の進行方向だった通りが周囲の露店ごと
焼き払われる。

見上げると、前足が翼になった大きな銀色のトカゲが、空中で旋
回していた。驚いたことに、背中には人影も見える。

「あれは……」

ワイルド

「飛竜よ! しかも銀翼ってことは、あいつが出てきたって事ね」
ティオの反応を見る限り、銀翼の飛竜の騎手はそれなりに有名な
らしい。あまりいい意味ではなさそうだが……。

他にも数体の飛竜の姿が見て取れ、街は逃げ惑う人々で混乱して
いた。

「こんなのが日常茶飯事なのか!？」

「ううん、ここ暫くは大人しかつただけ……」。

火竜族ってのはね、大陸最強の戦闘種族なの。普段は山奥に籠も
って生活している少数民族なんだけど、時折こっやって人里に降り
てくるのよ!」

そうして、ティオたち亜人を含む人々と度々衝突を起こすらしい。
そのほとんどが今回のように飛竜を使った空襲のため、火竜族へ
の対抗策は殆ど無いという。かろうじて弓兵隊が迎撃しようとして
いるが、飛竜の速度と圧倒的な火力の前に為す術もなかった。

「でも……」

襲撃者の行動に、俺は何となく違和感を覚える。

連中の攻撃目標が、何故か建物のような無機物に集中しているよ
うな気がしたのだ。逃げ遅れた人々には目もくれず、むしろ人混み
を避けるように火球を叩き込んでいるようにも見えた。

単なる襲撃、とは思えない。

「どうなってるんだ？」

「……………」

テイオは何かを知っているようだったが、黙って俺の手を引く。理由は謎のままだが、それでも逃げる途中で怪我をする人間もいるのだ、黙って見過ごすわけにはいかないだろう。

「誰か！ 娘が、娘がまだ中に！」

と、逃げる途中、燃え盛る建物を前に狼狽する女性の姿が見えた。周りの人間は遠巻きに眺めていたり、逃げるのに夢中だったりするが、建物を飲み込んでいる火の勢いを考えれば仕方のないことである。

ここでは水も貴重品らしく、消火作業もままならない。

「っ、テイオ、待った！」

無視して逃げようとする彼女の手を離し、俺は炎上する建物に向き直った。後からついてきていたバカ天使も、心配そうに俺の顔を覗き込む。

「神様、まさか！？」

「俺にしか出来ないことなんだろう？ だったら、迷うことはないさ」

「でも、今の信仰力だと、神様が……………」

消える。

ここで信仰力を使い果たせば、俺は塵と消えてしまうかもしれない。それでも、世界管理者という使命感が、俺を衝き動かしていた。イメージするのは水。それも少量では延焼を食い止められない。だが、俺の残された力では、火事を鎮火するだけの水を生み出すことは出来なかった。

「……………ちっ」

意識が遠のく。差し出した手のひらが、爪先からつつすらと消えていく。

ここまでか……………。

「神様っ！」

「タクミ、私の祈りも、あなたに捧げる！」

薄れゆく意識の中、バカ天使とティオ、二人の声が重なり……もう残っていないと思っていた力がどこからとも無く沸き上がってきた。

いや、違う。これが、信仰力を得るといふ事なのか。

「いける！」

途切れかけた意識を再び集中し、イメージを解き放つ。

「世界管理者が命じる《ワールドエンジニアリング》、構築せよ（ヴィルド）！！」

瞬間、噴き上がる巨大な水柱が燃え盛る建物を飲み込んでいた。

それは、俺達の目の前から一瞬で炎を消し去ると、土砂降りの雨となつて町中に降り注いでいく。

「やたー！ やりました、神様！ すごくすごい！」

「タクミ、あなたはやっぱり……」

無邪気に大喜びしているバカ天使と、思い詰めたような表情のティオと。

水を操り、取り残された女の子を母親の元へと返していた俺の頭上を、銀翼の飛竜が横切っていく。

その鞍に跨った騎手の、燃えるような深紅の瞳と目が合ったような気がするが、それも一瞬のこと。

ン！

そいつが吹き鳴らした音のない笛を合図に、街を襲撃していた飛竜の群れは一齐に転進し、夕闇の空へと羽ばたき消えていった。

どうやら、諦めてくれたらしい。

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

「いや、俺の力じゃなくて……」

その後、何度も何度も頭を下げる母娘に、俺は照れ臭くなってティオに視線を送る。

彼女が信仰力を捧げてくれたお陰で、能力を使用できたし先程ま

での疲労感も無くなった。だから、感謝されるべきは彼女の方である。

そのテイオは、しかし、真剣な顔付きを崩さない。

「三百年……この世界から神が居なくなつた“大喪失”パラダイスロストから三百年。

我々、風の旅団は新しい世界管理者を探していました」

「テイオ？」

「タクミ様……あなたの力で、この世界を救つて下さい。死に至る病に冒された、この、神無き世界をエレスティア」

すべては風環の導きのままに。

そう言つて、彼女はゆっくりと跪くのだった。

1 - 2 交易都市エーテル（後書き）

やったね神様！ 信者がふえるよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1739y/>

俺が異世界の神になる!?

2011年11月5日03時10分発行